

福武所長退任記念号によせて

福武所長は1986年3月に退任された。その在任期間は5年2ヵ月あまりであって、初代山田所長、二代馬場所長がそれぞれ2期8年在任されたのに比較すれば、長くはなかった。しかしこの期間は、社会保障や社会福祉、あるいは本研究所にとって大きな受難期であった。あのむずかしい時期を研究所が乗り切れたのは、福武所長の並ならぬ力があったからこそである。ここに「福武所長退任記念号」を特集したのも、研究所をあげて感謝の意を表するためにほかならない。

福武所長は、研究所創立当初から、参与あるいは理事として、研究所の運営に参加された。けれども、それは社会学者の立場からであって、社会保障という学際的な専門分野にはまったく素人であると、ご自分では考えられていた。研究所長就任も「自由人」として生きたいという平素の意に反して、やむをえず引き受けられたのであった。ところが、所長就任後いくばくもなく臨時行政調査会の第1次答申が提出され、福祉が赤字財政の元凶であり、社会保障の充実が民族の活力を低下させるとする俗論がにわかに強くなった。このことは社会保障研究を課題とする本研究所にとって、憂慮にたえないものであった。しかも行政改革における特殊法人の整理統合の対象として、当研究所も俎上にのせられたということがあった。あの当時の福武所長の心労と活躍は、研究所にとって忘れられてはならない。また、このことが契機になって、福武所長は素人ではあるがとことわりながら、『社会保障論断章』を公刊されたのであった。それは社会保障の費用の抑制に傾斜しすぎる議論に一矢を酬いるとともに、いかなる修正も福祉の後退と非難する権利主義的主張をもたしなめるものであった。

当時の社会保障は、まさに危機的状況にあった。高齢化の進行と低成長の持続のなかで、73年以来の健保や年金は徹底的に見直されざるをえなくなった。82年の老人保健法、84年の健保法等改正、85年の年金改革、86年の老人保健法改正など、重要な改正が今日もまだ続いている。これらは個別制度の改正というよりは、社会保障全体の再編成に結びつく流れである。

このような状況のなかで、社会保障研究の重要性はますます大きくなっている。それにもかかわらず、臨調路線は社会保障の抑制を強調し、研究所の存否さえ議論されるにいたったのであった。福武所長は年金、福祉、医療についての改革論の出版に指揮を取られるとともに、社会保障の基本問題についての理論研究4部作を公刊された。それは研究所内外の研究者の全面的な協力のもとになされた作業ではあったが、所長の熱意がこれを推進したのである。短期間とはいえ、かくも多彩な生産的な時期は、研究所20年の歴史においても、大きな意義をもつものである。これらの出版活動は本研究所に対する事実無根の非難を封ずるとともに、今後の研究所の進路を示唆するものである。われわれは福武所長の路線の跡を追いながら、新しい方向を拓く義務をもっている。

社会学者としての福武所長については、専門分野の異なる私などが論ずべきことではない。ただ、所長就任直後に出版された『日本社会の構造』は、まことに興味深く、多くの教示を得たことのみを記しておく。円熟した福武社会学のおそらくは到達点であろうが、平明な叙述の中に重要な指摘がなされていて、それこそ私のような素人でも参考になった。

ただ残念なのは、福武所長が任期末になって健康を害されたことである。幸いにその後はお元気であるが、今後ともに御健康を祈りたい。

1987年5月

小 山 路 男